「日々の理科」（第 1505 号） 2018（H30),-8,20

「初秋の八島湿原（３）」

お茶の水女子大学附属小学校教諭
お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員
田中　千尋　Chihiro Tanaka

八島ヶ原湿原は、高層湿原の一つだ。「高層湿原」という語は、「標高が高い場所にある湿原」という意味ではない。ミズゴケなどの植物が、ほとんど腐らずに泥炭化し、少しずつ土地を高層化（隆起した）した湿原のことだ。いわば、湿原の最終的な姿と言える。

八島ヶ原湿原は、多くの意味で学術的な価値が高い。１つ目は、「日本で最も南に位置する高層湿原」ということ。２つ目は、泥炭層が８メートルを超えて、国内最大級であること。これは、尾瀬ヶ原よりも厚いという。８メートル積もるのに１万２千年かかったというから、１年で１㎜も積もらない計算だ。３つ目は、駐車場から数分で行き着けることだ。もちろん、湿原に生息する動植物の豊富さは言うまでもない。当然、天然記念物に指定されている。

八島ヶ原湿原にはいくつかの池塘があるが、一番大きなものが「八島ヶ池」である。いくつのも島があるので、「七島八島」とも呼ばれている。私はこの島はミズゴケなどの植物が創った「浮島」だと思っていたが、どうもそうではないらしい。

（国土地理院提供、田中作図）

上の航空写真は、八島ヶ池の 36 年間の変化である。池塘の形状はわずかに変化している。特に左下（南西側）の「湾」のような部分が短くなって、草原化しているのがわかる。しかし、池塘の中にある大小 10 以上の島は、数も形状も位置も、全く変化していない。もし「浮島」なら、36 年間も同じ位置、同じ形状のわけはない。どうやらこれらは浮島ではなく、池塘が草原化する一歩手前の姿らしい。１万年以上前の縄文人は、八島ヶ原全体が湖だった姿を見ていたはずだ。今の八島ヶ池は、その化石のような存在なのだろう。